

河北潟干拓地のノネズミ相(第4報)

(石川県の小哺乳類相の研究 V)

大串 龍一・中村 正登

Ryoh-ichi OHGUSHI and Masato NAKAMURA: Small mammals found in the grassland of Kahoku-gata in Ishikawa prefecture IV.

河北潟干拓地における小哺乳類の分布調査は¹⁾、この1979年で4年目に入った。本年は、この地域の環境が2つの点でそれまでの年と大きくちがっている。その第一は、1978~79年の冬がこの地方には珍らしい非常に雪の少ない年であって、この干拓地でもほとんど積雪が見られなかったことである。このことはこの地域の動植物にかなり大きな影響を与えたものと思われる。その第二は、1979年の後半からこの地への入植がはじまり、草原であった干拓地の一部(北部の一带)が耕地化しはじめたことである。このため、従来のヨシ草原は大巾に減少しつつある。これら主たる2つの環境の変化がこの地域の小哺乳類だけでなく生物相一般にもかなりの影響を与えたのではないかと考えられる。

I 調査時期および方法

調査方法は従来と同様で、干拓地の中央を南北に走る幹線排水路ぞいに7地点を選び、1地点あたり20コのトラップをしかけた。トラップは1地点あたり金網かごわな5コ、シャーマントラップ10コ、はじきわなまたはパンチュートラップ5コの合計20コとした。1回の調査は1晩とし、午後3~6時にこれらのトラップを設置して、その翌朝6~9時に回収し、捕獲された小哺乳類の種類と数を調べた。トラップの餌としては主にサツマアゲを用い、パンチュートラップの場合はクルミの実あるいは配合飼料を用いた。

調査は2月、3月、4月、5月、7月、8月、9月、12月に各1回、合計8回行なった。この年は雪がほとんどなかったため、例年は実施できない2月、3月の調査も行なうことができた。

II 調査結果

各月の調査で採集された種類および個体数を第1表に、また地点別のそれを第2表に示した。

このように本年は4種の小哺乳類が採集された。これは従来ともこの河北潟干拓地で採集されてきた種類であ

第1表 1979年の月別採集個体数

月/日	ハタネズミ	ハツカネズミ	ドブネズミ	ジネズミ	計
2/7-8		4	7		11
3/6-7	1	10	4		15
4/7-8	3	18	2		23
5/15-16	3	4	4		11
7/3-4		6	4		10
8/28-29	2	4		1	7
9/27-28	2	8		1	11
12/12-13		5	1		6
計	11	59	22	2	94

第2表 1979年の地点別採集個体数

	ハタネズミ	ハツカネズミ	ドブネズミ	ジネズミ	計
st.1		8	5		13
st.2	1	5	2		8
st.3	2	4	3		9
st.4	2	9	3		14
st.5	2	7	3		12
st.6	1	22	1		24
st.7	3	4	5	2	14
計	11	59	22	2	94

る。1978年に1個体だけ採集されたアカネズミは²⁾、本年は全く採集されなかった。

季節別の採集結果をみると冬から春にかけてハツカネズミ、ドブネズミが多くとれ、春になるとハタネズミもとれる。夏から秋にかけてドブネズミは減少し、ハツカネズミも減少するが若干の個体はとれつつける。ジネズミは8、9月に1個体ずつとれたのみである。

採集地点をみるとハタネズミ、ハツカネズミ、ドブネズミともほぼ全地点にわたって採集されたが、その中で、ハツカネズミがst.6で著しく多く採れているのが目立っている。ジネズミはst.7だけで採集された。

III 考察

はじめにのべたように、本年は環境条件の2つの面でいちじるしい変化があった。それらの問題とノネズミ相の変化を関連させて考察してみたい。

1) 越冬の問題

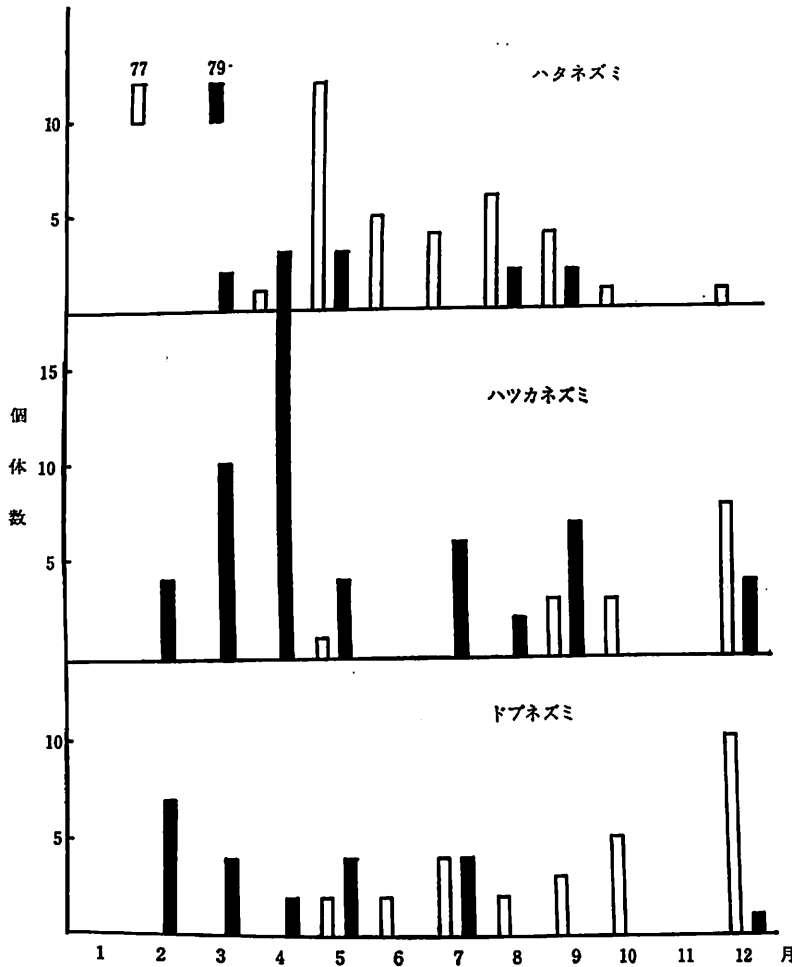
本年は2月、3月にも干拓地内で多くのドブネズミ、ハツカネズミが採集された。この事実から、これらの種類は野外で越冬したものと考えられる。

元来、ドブネズミ、ハツカネズミのようないわゆる住家性のネズミは冬季の食物貯蔵習性がなく、冬は人家内で越冬するといわれてきた。とくに寒冷な積雪地帯のばあい、野外で越冬できるかどうか疑問であった。今回の調査で、野外でも越冬する可能性のあることがわかった

が、これが例年おこなわれているのか、あるいは本年のような雪の少ない年だけの特別な例なのか、今の所不明である。

2) 季節消長の問題

各月の採集個体数の消長を、種類別に140 trap-nightあたりの個体数に換算したものを第1図に示した。この図には平年の消長を代表するものとして、同じ方法で計算した1977年の採集数の消長をも示してある。



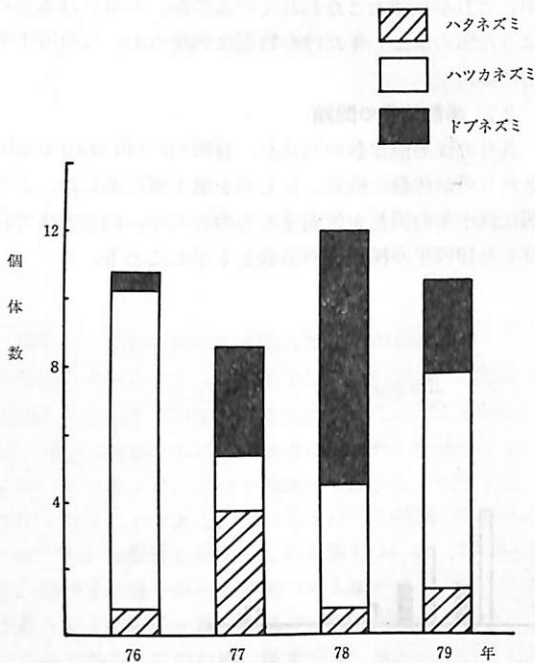
第1図 140 trap-night あたり採集数の同年変化

これで見るとハタネズミの消長は本年もとくに変わった傾向を示さないが、ドブネズミ、ハツカネズミの消長は例年とはいちじるしく変っている。これらの種はふつう春にはほとんど採集されず、夏からとれはじめて秋から初冬にかけて急増する。それに対して、今年は春早くから多数採集され、秋から冬にかけてむしろ減少するという例年と逆の傾向を示している。この夏以降の減少がどのような原因でおこっているのかは、今の所不明であ

る。

3) 4年間の推移

この調査をはじめから4年間のネズミ3種のとれかたを比較するため、1回の調査の基準数である140 trap-nightあたりの採集数を各年の資料から算出したものが第2図である。ハタネズミは1977年にとくに多く採れたほかは、毎年ほぼ同じように採集されている。ハツカネズミは1976年に多かったが、次の77年には著しく



第2図 140 trap-night あたり採集された移類構成と個体数の年次変化

減り、その後また増加してきている。それとは逆に、ドブネズミは1976年以降年々増えてきたが、本年はやや減少している。しかし3種の合計の個体数はこの4年間にあまり大きな変化を示していない。1978年に1個体だけ採集されたアカネズミは²⁾ 本年は全く採集されなかったが、78年の採集例は今回の調査地点外であり、干拓地全体としてみてもごく例外的なものであろう。

採集されるネズミの種類は、使用したトラップの種類によってもかなり影響を受けるが、1978年以降は定期調査に用いるトラップの種類をほぼ同じ割合で組合わせて使うようにしているので、ノネズミの種類構成自体に生じた変化をかなり正確に反映しているものと思われる。

このように考えると、1979年のとくに後半になってからは、河北潟の干拓地のノネズミはかなり大巾にへったように思われる。その中でもドブネズミの減少傾向がいちじるしい。これが何によって生じたかは今後解明されなくてはならないが、調査を通して気づくことのひとつは、1979年は前年にくらべて、ノネズミの天敵であるイタチ、タカ類の目撃数がいちじるしく増えたことである。草原の農耕地化は未だ干拓地の北部の非常に限られた所ではじまっているにすぎないが、これら天敵はほぼ全域にわたって目撃され、ノネズミ(とくにドブネズミ)の減少と対応しているようにみえる。しかしこれらの天敵も耕地化の進行につれてしだいに駆逐されると思われるので、ノネズミ相の今後の推移が注目される。

引用文献

- 1) 大串龍一・矢島孝昭・中橋典子(1977) 河北潟干拓地のノネズミ相(第1報)北陸病虫研報 25: 84~86.
- 2) 大串龍一・矢島孝昭・中村浩二・中橋典子(1978) 河北潟干拓地のノネズミ相(第2報)北陸病虫研報 26: 68~70.
- 3) 大串龍一・中村浩二・土屋正登(1979) 河北潟干拓地のノネズミ相(第3報)北陸病虫研報 27: 53~56.

(1980年4月25日受領)